 原 著

自覚症状と性格との関連についての研究

東京慈恵会医科大学古閑内科教室

古閑 義之, 樋口 正元, 内田 雅夫
宮島 真次, 長山 秀雄, 吉田 之好
草野 真郎

A STUDY ON THE CORRELATION BETWEEN SUBJECTIVE SYMPTOMS AND CHARACTER

BY

Y. Koga, M. Higuchi, M. Uchida, S. Miyajima,
H. Nagayama, Y. Yoshida, and S. Kusano.
Department of Internal Medicine (Koga Clinic),
Tokyo Jikeikai Medical College

梗概 自覚症状と性格との関連についての問題を解明する一助として、一つには *psycho-somatic*、他方には *somato-psychic* の観点より、次の如き研究を行なった。即ち、高校生について、健康状態別に、自覚症状と性格傾向とを調べ、次いで両者の関係を追求した。その結果、(1) 身体の不調にある者が最も多くの症状を訴えると共に、この群には、内向性、神経質、固執、抑鬱傾向の者が多かった。(2) 健康であると自ら考えている者の中にも、詳しく調査すると種々なる不定の症状を訴える者があり、その有する性格傾向によって症状の発現が大きく左右された。(3) 疾患を有する者は性格傾向によって、その症状の発現が左程影響されなかった。以上についてそれぞれ考察を試み、性格傾向の把握が、患者の取扱い上に如何に重要であるかと云う事を改めて認識した。

緒 言

物理化学と生物学を基礎として発展した現代医学が、いかに精密なる機械器具を駆使しようとも、人間が心身両面を有する複雑なる生体であるということを閑却するならば、必然、ある時期に、少なからぬ疑点に遭遇して当惑せざるを得ないであろう。こゝに、疾患を正しく診断・治療するに当つては、患者を心身両面から眺めて行くことが大切であるということが痛感される。これには、まず、訴えられる症状の正しい吟味と性格傾向の十分なる把握が必要であり、次いで両者の相互関係が追求されなければならない。これには二つの問題が提起されよう。その一つは、人間が、あ

る疾患に罹患した場合、それによつていかなる精神的影響を受けるかという *somato-psychic* な問題であり、他の一つは、精神的要因が、ある疾患の発病、経過、予後にいかなる影響をもたらすかという *psycho-somatic* な問題である。われわれは、これらの問題の解明の一助として、高校生を対象を選び、彼らの健康状態、自覚症状、ならびに、性格傾向を調査し、次いで、身体状況別に後二者の相互関係を追求することを試みて、興味ある成績を得たので、こゝに報告する。

研究方法

I. 研究対象

年令15~18才まで、ツ反応既陽性で通学中の高

表 1. 慈恵医大古閑内科調査表

姓名	男	女	年	月	日生(満)	年	月
調査月日	年	月	日	クラス	年	組	

次の質問の該当するところへ○印をつけ必要事項を記入して下さい。

I. 健康状態

- (1) 現在健康で元気に通学している。
- (2) 現在病気はないが、何処となく身体の調子がわるい。
- (3) 現在病気(病名)に罹っていて治療を受けている。

II. 既往症

- (1) 結核性疾患(病名)才時
- (2) ノイローゼ()才時
- (3) 眼の病気(病名)才時
- (4) その他床についたり、相当長く病院に通った様な病気に就いて病名、罹った時の年令、治るまでの期間、治療法等。

III. ツベルクリン反応

- (1) 陽転期 { 自然陽転 才時
BCG陽転 才時
- (2) 最終検査時の結果 { 陽性
(年 月) 陰性

校生 984名(男子 672名, 女子 312名)を対象とした。

II. 検査項目

(1) 健康状態調査

表1の調査表によって各人の健康状態を調査し、全例を1) A群(健康者群), 2) B群(不調者群), 3) C群(疾患群)に分けた。A群は、現在健康で元気に通学している(表1, Iの(1))者, B群は、現在病気はないが、どことなく身体の調子がわるい(表1, Iの(2))者であり、両群とも自己判断によつた。C群は、現在、病気にかゝつていて治療を受けている(表1, Iの(3))者で、医師の診断によるものである。疾患の内訳は表2のごとくである。

(2) 自覚症状調査

表3の肺結核患者機能病理調査表¹⁾を用いて、現在の身体の異状を記入せしめて調査した。この調査表は Pottenger 氏¹⁾の中毒症候(症状欄左端¹⁾), 内臓反射症候(同²⁾) 病巣局所症候(同³⁾)を示すもので、氏によると、(1)中毒症候は、結核菌毒素により惹起された臓器障害の症候で、

表 2. C群(疾患群)の病名及び数

病名	内向性	外向性	外向性	計
トラコーマ	/	/ 3	/ /	25
結膜炎	6	2 3	8	37
中耳炎	/	/	0	2
副鼻腔炎	3	/	3	7
鼻中隔湾曲症	/	0	0	1
感冒	0	/	/	2
関節炎	0	0	/	1
脚気	0	3	0	3
高血圧症	0	/	0	1
喘息	0	/	0	1
偏頭痛	0	/	0	1
鼻炎	/	/	0	2
腎炎	0	0	/	1
計	13	46	25	84

必ずしも結核症に特有なものではないが、生体反応の表現として診断上重要視すべきものとされ、

(2) 内臓反射症候は菌毒素が神経を介して間接的に、その効果器官に現われる症候群であつて、結核症の疑徴とも言うべきものであり、また(3) 病巣局所症候は肺結核そのものより起こる症状で

表 3. 古閑内科肺結核患者機能病理調査表

第	号	調 査 年 月 日	年	月	日
氏	名	年	才	男	女
令					
下記の症状のうちあるものの頭に○印をつけて下さい。					
(1)	気分がすぐれない いらいらする	つかれ易い 頭が痛い	物事にあき易い 気が落ちつかぬ	することがおつくうだ 眠れない	} 一般感情障害
	夢を見る 熱が上つたり下つたり	汗が出易い 胸ぐるしい	ね汗が出る 動きがする	熱がある 息ぎれがする	
	胃がはれぼつたい 胸がやける 便通がない	吐き気がする げっぷが出る 下痢する	食欲がない 胃がいたい のどがかわく	お腹が空きすぎる 腹がいたい	} 消化器症状 (胃腸症状)
	涙が出易い 毛が抜ける	手足がだるい	体重がへる	手足が冷い	
(2)	声がかかる 肩がこる	喉頭がおかしい 背中がいたむ	咳が出る 頬が紅い	胸がいたい 月経不順	
(3)	風邪をひき易い	風邪が仲々なおらぬ	喀血する	痰が出る	

あつて、診断上一つの確徴とみるべきものであると考えられている。自覚症状の調査に本調査表を選んだのは、各症候が一般的で理解され易いということ、対象が結核発病の危険年齢層に該当し、ツ反応が全員既陽性であることなどのためである。

(3) 性格調査

性格調査には Inventory Test として、1) 古閑の 向性検査²⁾、2) 淡路氏向性検査³⁾、3) Y-G 自己診断法⁴⁾、4) Taylor 不安テスト⁵⁾などを施行し、総合的に判断して内向性傾向のまざつていものを内向性、外向性傾向のまざつていものを外向性とし、とくにかたよつた傾向の見出せないものを一応両向性(中間型)とした。なお、10項目の Y-G 自己診断法より、神経質、固執、抑鬱傾向の強いものを選び、それぞれ、N群、P群およびD群とした。

Ⅲ. 検査時期

以上の諸検査はすべて1958年の夏季7月に施行した。

Ⅳ. 推計学的判定法

得られた成績は、すべて推計学的に比較検定し、その有意差判定の危険率は5%以下とし、10

%を有意差傾向とした。

研究成績

1. 健康状態、および、性格傾向について

表4に示すごとく、A群(健康者群)は724名(うち男性491, 女性233)で全例の72.5%を占め、これを向性別に観ると、内向性129名(17.8%), 両向性364名(47.9%), 外向性231名(33.2%), 神経質傾向の強いもの(N群)142名(19.6%), 固執傾向の強いもの(P群)145名(20.01%), 抑鬱傾向の強いもの(D群)98名(13.5%)であつた。B群(不調者群)は169名(うち男性

表4. 向性別に観た各群の例数

	A 群 (健康者群)	B 群 (不調者群)	C 群 (疾患群)
	例数(%)	例数(%)	例数(%)
内向性	129(17.8)	44(26.0)	16(17.5)
両向性	364(47.9)	86(50.8)	47(51.6)
外向性	231(33.2)	39(16.5)	28(30.7)
合 計	724(72.5)	169(17.1)	91(9.2)
N 群	142(19.6)	66(39.0)	19(20.8)
P 群	145(20.0)	65(38.4)	19(20.8)
D 群	98(13.5)	63(37.2)	17(18.6)

注(1) *印は例数984例(5672, 9312)に對する%

(2) A群(5491, 9233); B群(522, 947); C群(559, 932)

122, 女性47)で全例の17.1%を占め,これを向性別にみると,内向性44名(26.0%),両向性86名(50.8%),外向性39名(16.5%),N群66名(39.0%),P群65名(38.4%),D群63名(37.2%)であった。C群(疾患群)は91名(うち,男性59,女性32)で全例の9.2%を占め,これを向性別に観ると内向性16名(17.5%),両向性47名(51.6%),外向性28名(30.7%),N群19名(20.8%),P群は同じく19名(20.8%),D群17名(18.6%)であった。以上の成績を小括すると,A群は他の2群に比し大多数を占めていた。B群の内向性,神経質傾向,固執傾向および抑鬱傾向のものは,他の2群(A・C群)のそれに比し,それぞれ有意(内向性 $\chi^2=5.991$, 神経質傾向 $\chi^2=13.815$, 固執傾向 $\chi^2=13.815$, 抑鬱傾向 $\chi^2=13.815$)の多数を占め,また,外向性のものが他の2群のそれに比し少数の傾向($\chi^2=5.074$)を示した。換言すれば,B群が,他の2群に比し,その性格傾向において,内向性,神経質,固執抑鬱傾向の強いものの多いことがわかった。

2. A・B・C群別に観た症候の現われ方

表5(1)(2)に示すごとく,各群とも,症候の現われ方は,機能病理調査表の(1)群(中毒症候)の発現頻度が最も多く,中でも,上2段の一般感情障害が全体の1/3強を占め,次いで(2)群(臓器反射徴候)(3)群(病巣局所徴候)の順に減少している。それぞれの発現頻度の異なるもの10項目を挙げると表6のごとくである。これを各群別にみるとB群において,症候の発現頻度が有意差ならびに傾向をもつて最も多い項目の数が他の2群に比し,有意($\chi^2=13.815$)の多数を占めていることがわかった。換言すれば,B群(不調者群)が最も多く症候を訴えていることになる(B群25項目,C群5項目,A群0)。

3. 向性別による各群の症候の現われ方

向性別にA・B・C各群の症候の現われ方をみると,まずA群では表7(1)(2),内向性群に有意差ならびに傾向をもつて症候の発現頻度の大きな

表5. 各群(健康者群・不調者群・疾患群)別にみた症候の現れ方

症候	区別 例数	A群 724例	B群 169例	C群 91例	検定 χ^2
		例数(%)	例数(%)	例数(%)	
中毒症候	気分が落ち込む	80(11.0)	66(39.0)	15(16.4)	78.24
	つかれ多い	200(27.6)	93(55.0)	29(31.8)	46.77
	物事に興味ない	149(20.5)	56(33.1)	23(25.2)	12.33
	おどろいちゃう	85(11.7)	55(32.5)	22(24.1)	47.51
	いらぬ	53(7.3)	38(22.4)	9(9.8)	39.42
	顔が赤い	68(9.3)	33(19.5)	16(17.5)	14.58
	肩が痛む	96(13.2)	48(28.4)	14(15.3)	23.44
	眠れない	37(5.1)	13(7.6)	6(6.5)	1.86
	夢を見る	168(23.2)	45(26.6)	17(18.6)	2.14
	汗が出る	231(31.9)	62(36.6)	38(41.7)	4.37
一般感情障害	気分が落ち込む	26(3.5)	14(8.2)	5(5.4)	7.18
	顔が赤い	7(0.9)	10(5.9)	1(1.0)	18.98
	肩が痛む	2(0.2)	6(3.5)	0(0)	18.54
	眠れない	5(0.6)	12(7.1)	2(2.1)	29.31
	夢を見る	12(1.6)	14(8.2)	4(4.3)	20.68
	汗が出る	34(4.6)	19(11.2)	7(7.6)	10.72
	気分が落ち込む	21(2.9)	12(7.1)	4(4.3)	6.67
	顔が赤い	11(1.5)	11(6.5)	6(6.5)	19.42
	肩が痛む	130(17.9)	61(36.0)	16(17.5)	27.73
	眠れない	47(6.4)	11(6.5)	10(10.9)	2.57
臓器反射徴候	顔が赤い	34(4.6)	11(6.5)	4(4.3)	1.03
	肩が痛む	35(4.8)	20(11.8)	3(3.2)	13.23
	胃が痛い	32(4.4)	18(10.6)	7(7.6)	11.64
	腹が痛い	28(3.8)	21(12.4)	0(0)	26.53
	便通が悪い	40(5.5)	6(3.5)	4(4.3)	1.20
	下痢する	40(5.5)	19(11.2)	3(3.2)	9.17
	のどがかわく	122(16.8)	33(19.5)	5(5.4)	9.25
	涙が出る	82(11.1)	22(13.0)	21(23.0)	9.98
	手足が冷たい	127(17.5)	82(48.5)	23(25.2)	73.30
	体重が減る	58(8.0)	36(21.3)	11(12.0)	5.79
病巣局所徴候	手足が冷たい	42(5.8)	10(5.9)	4(4.3)	0.32
	足が冷たい	36(4.9)	12(7.1)	6(6.5)	1.40
	声がかかぬ	40(5.5)	16(9.4)	4(4.3)	4.20
	喉が痛い	36(4.9)	14(8.2)	9(9.8)	5.37
	咳が出る	18(2.4)	14(8.2)	6(6.5)	14.57
	胸が痛む	14(1.9)	4(2.3)	0(0)	2.04
	肩がこる	98(13.5)	33(19.5)	12(13.1)	4.06
	背中の痛み	24(3.3)	13(7.6)	3(3.2)	6.79
	顔が紅い	17(2.3)	4(2.3)	3(3.2)	0.32
	目眩する	24(3.3)	9(5.3)	4(4.3)	2.88
局所徴候	肩が痛む	122(16.8)	46(27.2)	25(27.4)	13.37
	腕が痛む	52(7.1)	20(11.8)	11(12.0)	5.50
	膝が痛む	0(0)	0(0)	0(0)	—
	足が痛む	33(4.5)	10(5.9)	5(5.4)	0.65

A群:健康者群, B群:不調者群, C群:疾患群.

*印有意差あり

る項目が最も多く(18項目),両向性群,外向性群にはそれぞれ1項目をみるに過ぎなく,内向性群において症候の発現頻度の異なる項目は他の2群に比し有意差($\chi^2=13.815$)を以て多数を占めていることがわかった。換言すれば,A群では,内向性のものが最も多く症候を訴えていることになる。次にB群では表8(1)(2),向性別による

表 6. 発現頻度の多い10項目

区別 症候並例数	A 群	B 群	C 群
1 汗が出易い	231	93	38
2 つかれ易い	200	82	29
3 夢をみる	168	66	25
4 物事に敏感易い	149	62	23
5 食欲が落ち易い	130	61	22
6 手足がだるい	127	56	21
7 風邪を引易い	122	55	17
8 肩がこる	98	48	16
9 気が落ちつかぬ	96	46	15
10 する事にうつかう	85	45	14

症候の現われ方にはほとんど差がなく、有意差、ならびに、傾向をもつて症候の発現頻度の異なる項目は内向性群に2項目、外向性群に同じく2項目を見るに過ぎない。換言すれば、B群では、その症候の発現が、内・両・外3向性間にはほとんど差がみとめられないということがわかった。また、C群では(表9(1)(2)), 有意差ならびに傾向をもつて症候の発現頻度の異なる項目は内向性群に5項目、両向性群に2項目、外向性群に1項目で、3群間において、発現頻度の異なる項目に有意差はみとめられなかつた。換言すれば、C群ではB群と同じく症候の発現が、内・両・外3向性間にはほとんど差をみとめないということがわかった。

次に、神経質傾向、固執傾向、抑鬱傾向の強いものが示す症候の発現頻度を、それぞれの対象に比較すると、まずA群においては(表10(1)(2)) 有意差ならびに傾向をもつて症候の発現頻度の異なる項目はN群23, P群22, D群25で、それぞれの対象(非N群0, 非P群0, 非D群0)に比し有意($N.\chi^2=6.635$, $P.\chi^2=10.827$, $D.\chi^2=10.827$)の多数を占めた。次にB群では(表11(1)(2)), 同じく有意差ならびに傾向をもつて症候の発現頻度の異なる項目はN群9, P群12, D群16で、それぞれの対象(非N群0, 非P群0, 非D群3)に比し、有意($N.\chi^2=6.635$, $P.\chi^2=$

表 7. 向性別にみた症候の現れ方 A群(健康者群)

区別 症候	内向性群 129例	両向性群 364例	外向性群 231例	検定 χ^2
一般感情障害				
不安が強い	26(20.1)	40(10.9)	18(7.7)	12.43*
つかれ易い	44(34.1)	100(27.4)	49(21.2)	9.09*
物事に敏感易い	33(25.5)	67(18.4)	48(20.7)	3.01
夢をみる	28(21.7)	33(9.0)	26(11.2)	14.52*
いらいらする	20(15.5)	22(6.0)	8(3.4)	19.57*
頭痛が強い	21(12.8)	32(8.7)	17(7.3)	8.11*
気が落ち易い	28(21.7)	41(11.2)	25(10.8)	10.70*
眠れない	12(9.3)	16(4.3)	9(3.8)	5.73
夢を見る	36(28.6)	87(23.9)	42(18.0)	4.43*
汗が出易い	48(37.2)	115(31.5)	71(30.7)	1.16
おどろく	9(6.9)	14(3.8)	3(1.2)	7.93*
熱がある	0(0)	6(1.6)	2(0.8)	2.56
熱が強い	1(0.7)	1(0.2)	0(0)	1.50
胸が痛い	2(1.5)	4(1.0)	0(0)	2.99
動きが速い	6(4.6)	5(1.3)	1(0.4)	9.62*
息切れがする	9(6.9)	14(3.8)	11(4.7)	2.04
消化器症候				
胃が痛い	2(1.5)	12(3.2)	7(3.0)	0.99
吐き気がする	3(2.3)	8(2.1)	1(0.4)	3.16
食欲が落ち易い	23(17.7)	99(27.1)	26(11.2)	10.54*
お腹が膨れる	7(5.4)	27(7.4)	11(4.7)	1.97
胸が膨れる	10(7.7)	10(2.7)	12(5.1)	6.14*
中腸系症候				
げっぷが出る	12(9.3)	14(3.8)	10(4.3)	8.40*
胃が痛い	9(6.9)	16(4.3)	8(3.4)	2.35
腹が痛い	8(6.2)	18(4.9)	7(3.0)	2.12
便秘が強い	9(6.9)	21(5.7)	11(4.7)	0.78
下痢がする	8(6.2)	19(5.2)	10(4.3)	0.61
のどがかわく	26(20.1)	54(14.8)	40(17.3)	2.06
痰が出る	18(13.9)	45(12.3)	19(8.2)	3.51*
手足がだるい	32(24.8)	63(17.3)	31(13.4)	7.40*
体が重たい	13(10.0)	25(6.8)	12(5.1)	3.10
手足が冷たい	13(10.0)	20(5.4)	10(4.3)	5.06*
手が震える	10(7.7)	13(3.5)	15(6.4)	4.37*
内臓反射症候				
声がかれる	11(8.5)	20(5.4)	9(3.8)	3.46
喉が腫れる	10(7.7)	16(4.3)	11(4.7)	2.28
息が苦しい	3(2.3)	10(2.7)	5(2.1)	0.21
胸が痛い	5(3.8)	4(1.0)	3(1.2)	4.91*
肩がこる	27(20.9)	41(11.2)	31(13.4)	7.62*
背が痛む	9(6.9)	11(3.0)	6(2.5)	5.37*
手足が冷たい	2(1.5)	7(1.9)	8(3.4)	1.84
月経不順	7(5.4)	14(3.8)	4(1.7)	3.17
病後経過				
風邪が治らない	25(19.3)	68(18.6)	30(12.9)	3.97
風邪が治る	10(7.7)	22(6.0)	50(21.6)	36.10*
暑熱がする	0(0)	0(0)	0(0)	—
痲疹が出る	10(7.7)	11(3.0)	12(5.1)	5.33*

*印有差
△印傾向

10.827, $D.\chi^2=10.827$)の多数を占めた。最後に、C群では(表12(1)(2)), 同じく有意差ならびに傾向をもつて症候の発現頻度の異なる項目はN群6, P群8, D群11で、それぞれの対象(非N群1, 非P群1, 非D群0)に比し有意($N.\chi^2=3.841$, $P.\chi^2=5.412$, $D.\chi^2=10.827$)の多数を占めた。なお、以上の成績のそれぞれをA・B・C各群別に比較するとN・P・D3群共、有意差ならび

表8. 向性別にみた症候の現れ方 B群(不調者群)

症候	性別 例数	内向性群 44例 例数(%)	両向性群 86例 例数(%)	外向性群 39例 例数(%)	検定 χ^2
中 毒 症 候	一般感情障害	13 (29.5)	35 (40.6)	20 (51.2)	3.11
	つかれ多い	28 (63.6)	47 (54.6)	20 (51.2)	1.46
	物事に飽き多い	19 (43.1)	23 (26.7)	11 (28.2)	3.89
	ふさふさする	15 (34.0)	27 (31.3)	13 (33.3)	0.11
	いらぬ	11 (25.0)	22 (25.5)	8 (20.5)	0.48
	頭が痛	10 (22.7)	16 (18.3)	8 (20.5)	0.30
	気が荒れる	12 (27.2)	23 (26.7)	12 (30.7)	0.23
	眠れない	5 (11.3)	6 (6.9)	5 (12.7)	1.27
	夢を見る	12 (27.2)	20 (23.2)	15 (38.4)	3.15
	汗が出る	18 (40.9)	31 (36.0)	12 (30.7)	0.93
定 症 候	血が止まる	5 (11.3)	7 (8.1)	3 (7.6)	0.47
	熱が出る	3 (6.8)	4 (4.6)	2 (5.0)	0.54
	息が止まる	1 (2.2)	4 (4.6)	1 (2.5)	0.51
	胸が重たい	6 (13.6)	6 (6.9)	1 (2.5)	2.63
	動悸がする	4 (9.0)	8 (9.3)	2 (5.0)	0.52
	息切れがする	7 (15.9)	9 (10.4)	4 (10.2)	0.77
	胃が痛	3 (6.8)	4 (4.6)	4 (10.2)	1.95
	吐き気がする	4 (9.0)	6 (6.9)	1 (2.5)	1.43
	食欲不振	21 (47.7)	29 (33.7)	14 (35.8)	2.49
	お腹が重たい	4 (9.0)	8 (9.3)	1 (2.5)	1.78
中 毒 症 候	胸が重たい	3 (6.8)	6 (6.9)	2 (5.0)	2.17
	げっぷが出る	5 (11.3)	11 (12.7)	4 (10.2)	0.16
	胃が痛	3 (6.8)	6 (6.9)	8 (20.5)	6.27
	腹が痛	5 (11.3)	7 (8.1)	9 (23.0)	6.27
	便秘がひどい	2 (4.5)	4 (4.6)	0 (0)	1.82
	下痢がする	3 (6.8)	11 (12.7)	5 (12.7)	1.11
	口が苦い	7 (15.9)	19 (22.0)	7 (17.9)	0.78
	痰が出る	10 (22.7)	13 (15.1)	2 (5.0)	5.14
	手足が冷たい	21 (47.7)	43 (50.0)	16 (41.0)	0.89
	体臭がする	7 (15.9)	19 (22.0)	9 (23.0)	0.83
定 症 候	手足が冷たい	7 (15.9)	4 (4.6)	2 (5.0)	5.60
	息が止まる	3 (6.8)	9 (10.4)	0 (0)	3.58
	多汗が出る	2 (4.5)	11 (12.7)	2 (5.0)	3.39
	喉が乾く	4 (9.0)	7 (8.1)	2 (5.0)	0.50
	咳が出る	5 (11.3)	5 (5.8)	4 (10.2)	1.98
	胸が痛	0 (0)	1 (1.1)	2 (5.0)	1.26
	肩がこる	7 (15.9)	15 (17.4)	9 (23.0)	0.78
	背中の痛み	7 (15.9)	2 (2.3)	5 (12.7)	11.82
	顔が紅い	2 (4.5)	2 (2.3)	0 (0)	1.74
	月経不順	3 (23.0)	5 (23.8)	1 (7.6)	1.74
病 症 所 候	風邪が治らない	15 (34.0)	23 (26.7)	5 (12.7)	3.80
	風邪が治る	6 (13.6)	12 (13.9)	1 (2.5)	3.85
	嘔吐がする	0 (0)	0 (0)	0 (0)	—
	痰が出る	3 (6.8)	5 (5.8)	2 (5.0)	0.10

*印 有意差
△印 傾向

表9. 向性別にみた症候の現れ方 C群(疾患群)

症候	性別 例数	内向性群 16例 例数(%)	両向性群 47例 例数(%)	外向性群 28例 例数(%)	検定 χ^2
中 毒 症 候	一般感情障害	5 (31.2)	8 (17.0)	2 (7.1)	4.92
	つかれ多い	5 (31.2)	20 (42.5)	5 (17.8)	4.83
	物事に飽き多い	7 (43.7)	11 (23.4)	3 (10.7)	6.28
	ふさふさする	4 (25.0)	9 (19.1)	8 (28.5)	0.87
	いらぬ	3 (18.6)	3 (6.3)	3 (10.7)	1.99
	頭が痛	6 (37.5)	8 (17.0)	2 (7.1)	6.53
	気が荒れる	4 (25.0)	9 (19.1)	1 (3.5)	4.59
	眠れない	2 (12.5)	3 (6.3)	1 (3.5)	1.17
	夢を見る	2 (12.5)	6 (12.7)	6 (21.4)	1.15
	汗が出る	8 (50.0)	23 (48.9)	7 (25.0)	4.69
定 症 候	血が止まる	0 (0)	3 (6.3)	2 (7.1)	1.19
	熱が出る	0 (0)	0 (0)	0 (0)	—
	息が止まる	0 (0)	0 (0)	0 (0)	—
	胸が重たい	1 (6.2)	1 (2.1)	0 (0)	1.53
	動悸がする	1 (6.2)	3 (6.3)	1 (3.5)	0.19
	息切れがする	0 (0)	5 (10.6)	1 (3.5)	2.80
	胃が痛	1 (6.2)	2 (4.2)	1 (3.5)	0.17
	吐き気がする	1 (6.2)	3 (6.3)	0 (0)	1.79
	食欲不振	3 (18.6)	12 (25.5)	3 (10.7)	2.41
	お腹が重たい	3 (18.6)	7 (14.8)	2 (7.1)	1.38
中 毒 症 候	胸が重たい	1 (6.2)	3 (6.3)	0 (0)	1.79
	げっぷが出る	1 (6.2)	0 (0)	2 (7.1)	3.11
	胃が痛	2 (12.5)	3 (6.3)	1 (3.5)	1.25
	腹が痛	0 (0)	2 (4.2)	0 (0)	2.04
	便秘がひどい	0 (0)	4 (8.5)	2 (7.1)	1.48
	下痢がする	0 (0)	0 (0)	2 (7.1)	4.97
	口が苦い	6 (37.5)	6 (12.7)	3 (10.7)	6.42
	痰が出る	2 (12.5)	11 (23.4)	8 (28.5)	1.00
	手足が冷たい	6 (37.5)	10 (21.9)	6 (21.4)	1.84
	体臭がする	1 (6.2)	9 (19.1)	1 (3.5)	15.27
定 症 候	手足が冷たい	1 (6.2)	1 (2.1)	3 (10.7)	2.63
	息が止まる	0 (0)	2 (4.2)	2 (7.1)	1.28
	多汗が出る	0 (0)	2 (4.2)	2 (7.1)	1.32
	喉が乾く	2 (12.5)	4 (8.5)	1 (3.5)	1.29
	咳が出る	2 (12.5)	2 (4.2)	2 (7.1)	1.29
	胸が痛	0 (0)	0 (0)	0 (0)	—
	肩がこる	3 (18.6)	5 (10.6)	3 (10.7)	0.99
	背中の痛み	0 (0)	2 (4.2)	1 (3.5)	0.71
	顔が紅い	0 (0)	2 (4.2)	1 (3.5)	0.71
	月経不順	1 (20.0)	2 (4.2)	0 (0)	1.63
病 症 所 候	風邪が治らない	5 (31.2)	11 (23.4)	7 (25.0)	0.55
	風邪が治る	3 (18.6)	4 (8.5)	3 (10.7)	1.24
	嘔吐がする	0 (0)	0 (0)	0 (0)	—
	痰が出る	1 (6.2)	3 (6.3)	3 (10.7)	0.45

*印 有意差
△印 傾向

に傾向をもつて、症候の発現頻度の大きな項目がA群において他の2群に比し有意($N.\chi^2=13.815$, $P.\chi^2=9.210$, $D.\chi^2=9.210$)の多数を占めていた。換言すれば、神経質傾向、固執傾向、抑鬱傾向の強いものは、それぞれの対象に比較して症候を多く訴え、中でもA群において有意差をもつて、他の2群に比し最も著明であることがわかった。

以上を小括すると、(1)A群では、内向性

ならびに神経質、固執、抑鬱傾向の強いものが、それぞれの対象に比し症候を多く訴える。(2)B群では、内・両・外3向性間には症候の発現にほとんど差なく、神経質、固執、抑鬱傾向のものはそれぞれの対象に比し症候の発現が比較的多かった。(3)C群ではB群とほとんど同じ関係にあった。(4)A群、すなわち、健康者群が性格

表11. 向性別 (N・P・D群) にみた
症候の現れ方 B群 (不調者群)

[illegible]

* 印 有意差, $\triangle$ 印 傾向

考 案

(1) 健康状態について
高校生の健康状態を調査して、72.5%の大多数が全く健康であると自ら考え、9.2%に疾患を有

表12. 向性別 (N・D群) にみた症候の現れ方 C群 (疾患群)

症候	区別 例数	A群		χ ²	P群		χ ²	D群		χ ²
		例数 (%)	例数 (%)		例数 (%)	例数 (%)		例数 (%)	例数 (%)	
一般感情障害	気分が落ち込む	(2.3)	(1.5)	1.90	(2.0)	(1.5)	0.39	(2.5)	(1.8)	0.81
	つかれ易い	(3.5)	(2.7)	0	(3.8)	(3.5)	0.28	(3.2)	(3.1)	0.11
	物事に集中しにくい	(3.7)	(2.3)	1.25	(3.7)	(2.3)	0.72	(2.5)	(2.2)	1.16
	いらだち易い	(2.3)	(1.5)	0.74	(1.5)	(1.1)	0.35	(1.5)	(1.4)	0.07
	頭の痛	(3.7)	(2.1)	0.64	(2.6)	(2.6)	0.22	(2.5)	(2.2)	0.54
	肩の痛	(2.3)	(2.5)	0.26	(1.5)	(1.2)	0	(3.2)	(2.8)	0.94
	眠れない	(2.5)	(1.5)	0.51	(2.0)	(2.7)	0.67	(1.1)	(1.0)	0.07
	夢を見る	(1.2)	(2.2)	2.02	(1.5)	(2.8)	0.79	(1.1)	(1.2)	0.01
	汗が止まらない	(3.8)	(3.3)	0.89	(3.1)	(3.6)	0.60	(2.0)	(2.5)	0.24
	口が苦い	(1.2)	(1.5)	0	(1.5)	(1.1)	0.32	(1.1)	(1.4)	0.01
消化器障害	腹が膨らむ	(1.0)	(1.3)	0.25	(1.0)	(1.3)	0.25	(1.0)	(1.3)	0.05
	胸が苦い	(1.0)	(1.0)	—	(1.0)	(1.0)	—	(1.0)	(1.0)	—
	胃が痛	(1.0)	(2.7)	0.15	(1.0)	(2.7)	0.51	(1.0)	(1.3)	1.15
	嘔吐する	(3.7)	(1.3)	0.77	(2.5)	(2.7)	2.35	(1.1)	(1.3)	0.33
	息切れがする	(1.2)	(1.3)	0.21	(1.2)	(1.3)	0.22	(1.1)	(1.1)	0.50
	胃の調子が悪い	(1.0)	(1.5)	0.32	(1.0)	(1.5)	0.09	(1.0)	(1.1)	0.16
	吐酸がする	(1.0)	(1.3)	1.95	(1.0)	(1.3)	0.12	(1.0)	(1.2)	0.01
	食慾が落ちる	(2.1)	(2.6)	0.22	(1.0)	(2.6)	0.22	(2.5)	(2.2)	0.99
	お腹が空く	(1.2)	(2.5)	0.81	(1.7)	(2.7)	0.54	(1.7)	(2.2)	0
	胸がやけ	(1.0)	(1.5)	0.32	(1.0)	(1.5)	0.32	(1.7)	(2.7)	3.33
中腸系障害	けいれんがする	(1.0)	(1.1)	0.23	(1.0)	(1.1)	0.23	(1.0)	(1.2)	0.34
	胃が痛	(1.2)	(1.3)	0.21	(1.2)	(1.3)	0.22	(1.3)	(1.3)	0.53
	腹の痛	(1.0)	(1.0)	—	(1.2)	(1.0)	0.09	(1.0)	(1.0)	—
	便通が悪い	(3.7)	(1.3)	0.77	(2.5)	(1.0)	0.17	(1.7)	(1.0)	0.77
	下痢がする	(1.0)	(1.1)	0.23	(1.0)	(1.7)	0.07	(1.0)	(1.2)	1.92
	口が苦い	(2.1)	(1.3)	1.18	(1.7)	(1.0)	0.37	(1.7)	(1.3)	3.23
	消化不良	(2.1)	(2.3)	0.05	(1.7)	(2.0)	0.73	(1.7)	(2.4)	1.97
	手足が冷たい	(3.7)	(2.7)	1.14	(2.3)	(2.0)	0.61	(1.1)	(2.0)	0.64
	体重が増える	(3.7)	(2.5)	0.14	(1.7)	(1.1)	0.30	(1.7)	(1.4)	2.92
	手足が熱い	(1.2)	(1.1)	0.06	(1.5)	(1.7)	2.36	(1.7)	(2.7)	3.03
内臓反射症候	毛が抜け	(1.2)	(1.9)	0.09	(1.5)	(1.5)	0.55	(1.8)	(1.7)	0.01
	声がかれる	(2.5)	(2.7)	2.36	(2.5)	(2.7)	2.35	(1.7)	(2.1)	3.05
	喉の調子が悪い	(2.1)	(1.9)	3.26	(1.7)	(1.3)	0.89	(1.7)	(1.4)	0.07
	喉が乾く	(2.5)	(1.5)	0.55	(1.7)	(1.1)	3.09	(2.5)	(1.7)	1.01
	胸が苦い	(1.0)	(1.0)	—	(1.0)	(1.0)	—	(1.0)	(1.0)	—
	肩がこる	(1.2)	(1.2)	1.30	(1.7)	(2.5)	0.14	(2.5)	(1.8)	2.07
	背中の痛	(1.2)	(2.7)	0.34	(1.7)	(2.7)	5.28	(1.8)	(2.7)	0.74
	手足が冷たい	(1.0)	(1.1)	0.23	(1.2)	(2.7)	0.34	(1.0)	(1.0)	0.07
	月経不順	(3.3)	(2.1)	3.32	(2.5)	(1.7)	1.78	(2.5)	(1.2)	1.52
	同様の症状	(2.0)	(2.1)	0.44	(2.3)	(2.7)	0.01	(1.2)	(2.6)	0.61
病後症候	病後の経過	(2.1)	(1.0)	1.80	(2.4)	(1.7)	1.80	(1.3)	(1.4)	2.02
	喉が乾く	(1.0)	(1.0)	—	(1.0)	(1.0)	—	(1.0)	(1.0)	—
	喉が乾く	(2.5)	(1.1)	1.32	(1.2)	(1.5)	0	(1.7)	(1.0)	1.32

* 印 有意差, Δ印 傾向

する者のある一方、17.1%に身体の不調感を訴えるものゝあることは、夏季7月、梅雨期という調査時期においては、気温、湿度などの身体に及ぼす影響を十分に考慮しなければならないけれど

も、これらを単なる不調感として看過し去ることには危険が伴うことであつて、このような subclinical な状態が、なんらかの疾患の発病準備状態であるかも知れないということを考慮する必要がある。このことは沖中氏症候群⁶⁾、小金井氏症候群⁷⁾、阿部教授らの脚気様状態⁸⁾、古閑の迷彩結核^{9)~14)}などの症候、病因などに照し合せて、一応考慮の余地のある問題として留意しなければならないということを本成績が示唆している。

(2) 性格傾向について

性格傾向については、すでに、思春期より青年に達するに従い、性格が、いわゆる内向性に傾くと言われているが、本研究においては身体状況を一応保留してみると、19.2%に内向性のものを観て、その頻度は言われるごとく多くないことがわかつた。これについては、内向性ということの判定が検査に用いた Inventory Test の不備にあるかも知れないということも、一応考慮しなければならないけれども、季節、身体状況、環境なども考慮して早急には断じ難いことが知られる。一方、B群(不調者群)において、他の2群に比し、内向性、神経質、固執、抑鬱傾向の多いことは、この群に症候の発現の多いということゝ考え合せてみると、興味深い成績を示していることがわかつた。上記のごとき性格傾向の者が身体不調感を訴えるという psycho-somatic な観点からも、一方、身体が不調に陥つたがために、そのような性格傾向を示すに至つたという somato-psy-chic な観点からも解釋されて、心身相関の問題を解決するには、いかに多くの困難をとまなうものであるかということを知ることができた。

(3) A・B・C群別に観た症候の現れ方について

本成績より、自ら健康であると考えているもの(A群=健康者群)の中にも、詳しくつきずゝんで調査すれば、かなりの頻度に身体の異常を訴えているもののいることがわかつたのであるが、中でも多数を占めているのは一般感情障害であつて、このことは、健康者であつても、われわれが

日常経験するごとく、生理的範囲内にあつて、種々なる身心の異状を時に自覚するものであることを知るとともに、emotional な要因がいかにか人間の身心の理解にさいして重要であるかを示唆している。また、B群（不調者群）においては、A群に比し多くの症状が訴えられたということは、当然なことではあるが、それに比しC群の症状発現頻度の少なかつたことは、その疾患が、一般に軽症のもの、および、身体の一部に局限している結膜炎、トラコーマ、鼻炎などが多かつたためと解釋される。もし、C群として内科的疾患、ことに中・重症例を対象とすれば、さらに異なつた成績が期待されよう。

(4) 向性別にみた症候の現われ方について

特殊の性格傾向者について、その愁訴、症候の発現の最も多いのは健康者群であり、不調者群、疾患群においては性格傾向によつて、さほど、症候の発現が左右されないことを知つた。すなわち、健康者群では、その性格傾向が、内向性、神経質、固執、抑鬱傾向の強いものほど、ささいな身心の変調に注意を向け、それに執着し、心気性となり、その結果、愁訴が多く現われることが理解される。一方、不調者群では、現実では、症候の発現が多いにも拘らず、その性格傾向の差異によつて、予想したほどに症候発現率が左右されないことがわかつたが、この事実は次の二つのことが結びついて生じた現象と、一応の解釋ができよう。その一つは健康者群の症候発現のメカニズムと同様に、内向性、神経質、固執、抑鬱傾向の強いものが身心の不調に気づき、健康者群よりも、さらに多くの症候を自覚してくる場合であつて、性格傾向の質と量の問題によつて一応解され、他の一つは、性格傾向が、内向性、神経質、固執、抑鬱傾向でもないものが、なんらかの疾患を潜在させており、そのために、性格傾向の如何に拘らず、多くの症候を訴えるに至るであろうことが窺われるのである。この両者が混在してB群を形成し、症候の発現頻度が性格傾向に関係なく平均して現われてくるものであらうと解される。したがつて、実

際の臨床においては、外向性者、または、神経質、固執、抑鬱傾向でないものが症候を多く訴えた場合に、その潜在疾患、または、未発見の病巣について、より多くの注意を向ける必要がある。

疾患群でも、不調者群と同様、さほど、性格傾向によつて症候の発現が影響されていないのは、その有する疾患が軽症で、身体の一部に局限されたものが多かつたこと、一度、すでに疾患に罹患したということが、却つて、自分の不調不振の原因の不明の場合よりも、患者の心理を安定した状態に落着かせ、性格傾向如何に拘らず、比較的限定された症候のみを訴えるに至るものであらうと解される。この事は、Pottenger¹⁾ がいうごとく、結核病変のいまだ明らかでない時期に、不定の症状を多く訴え、病変が明瞭となり、疾患を正しく認識した時に、前記の不定の症候が消失して臓器固有の症状のみが現われてくるということ、照し合せてみても納得されよう。

結 論

以上、われわれの得たる成績を綜合して次の結論に到達した。

(1) 自ら健康であると考えている者（健康者群）の中にも、さらに詳細に調査すれば、季節、環境などにより、種々なる不定の症状を訴えるものがあることを知つた。さらに、性格傾向が内向性、神経質、固執、抑鬱傾向にあるものほど、訴える症候が多いことがわかつた。

(2) 身体が不調であると考えている者（不調者群）には、その性格傾向が、内向性、神経質、固執、抑鬱傾向の強いものが、他の2群（健康者群及び疾患群）よりも多かつた。また、症候の発現も3群中最も高率であつた。しかし、症候の発現は、さほど、性格傾向には影響されない。このことは、一応、内向性格者が、いわゆる疾病をつくるとなす psycho-somatic の概念を裏づけることとなり、また、この群の中における、両向性、外向性者などにおいては、明らかに、なんらかの疾患が潜在しているのではないかという示唆がみられるのである。

(3) 疾患群では、不調者群と同様、その症候の発現頻度は、その有する性格傾向に影響されることが少ない。このことは、疾患に罹患したという事実の前に、心理状態において、ある安定感をもたらす、性格傾向に関係なく、固有の症状のみが訴えられるためであろうと考えられた。

引用文献

- 1) Pottenger: Tuberculosis, 1953. — 2) 古閑：第14回日本心理学会大会抄録集，S. 24. — 3) 淡路：向性調査と向性指数，心理学研究，7，1932. — 4) 矢田部：京都大学文学部研究紀要第3，S. 29. Guiford, J.P. & Martin, H.G.: The Guiford-Martin, Personnel Inventory Test. California 1943. — 5) Taylor, J.A.: J. Abnorm. and Soci-

alpsycho. 482, 1953. — 6) 沖中：治療，Vol. 33, No. 11. — 7) 小金井：臨内小，Vol. 8, No. 3. — 8) 阿部：日内会誌，Vol. 44, No. 11, S. 31. — 9) 古閑：結核研究の進歩，Vol. 19, S. 32. — 10) 古閑：東京慈恵医大誌，Vol. 67, No. 4. — 11) 古閑他：臨内小，Vol. 9, No. 4. — 12) 古閑他：臨内小，Vol. 9, No. 6. — 13) 古閑他：臨内小，Vol. 10, No. 5. — 14) 樋口：東京慈恵医大誌，Vol. 70, No. 4.

参考文献

- 1) 鈴木：肺結核患者の精神病理に関する研究. — 2) 長山：矯正医学，Vol. 6, S. 32. — 3) 長山：東京慈恵医大誌，Vol. 74, No. 7. — 4) 高良：東京慈恵医大誌，Vol. 74, No. 6. — 5) K. Koga: Jikei Medical Journal, Vol. 3, No. 2. — 6) Anton J. Carlson: Feeling and Emotions, 1950.